目次

一切の勝利は人格にあり……本多日生
教義信條の整束……本多日生
ある日の佛樣の獨り言……古田昂生
法華經要文講義……本多日生
記事報導……

第廿九年拾一月號

お飯りなら、此處でお待します』と、覺ちやんは、何と云つても上りませんので、奥さんは麥湯や、おせんを持つて來て、サアお喰べなさいと覺チャンに下さいました。覺チャンはお皿を喰べたり、麥湯を頂いたりして十分計も待つたのですが、先生のお飯りがありません。覺チアンの心配は一通りでありませんので、

『先生のお飯りが遲いようですから、僕は飯りますと』と云ひますと、

『近所へ行つたのですから、もうお飯りになります、今少しお待なさい』と、お友達のことや、學校の話など色々して居る内に先生かお飯りと云ふ聲に、覺チアンは飛び立つ樣に喜びました。

五風先生は玄關から奥の方へ行かれて暫くすると、手に一本の手紙を持つて出てこられて、

『覺之進どのか、よう遲い道を獨りでこられた、大層待つたと云ふ事だ、氣の毒であつた遲事は是れに認めてある、御兩親によろしく言ふて吳れ。』

覺チアンは『先生今日は』と頭を下げるなり遲事を受取り、さよならと云ふが早いか、一目散に韋駄天のような樣で、先生の家を離け出しました。

【三】

行きには野も山も見るからに、美しい天人の世界の樣に思はれて、樂しかつたのでしたが、飯りには、若し遲れて途中で暮れでもしたらお父サンに叱られる計りでなく、どんなに、さむしい事かとの心配から、花が咲て居ようが、鳥が面白そうに歌を唄つてゐようが何物も眼にも耳にも遲入りません、只々獨りマラソン競爭でもするかのように、飛ぶように走るのです。

けれども道は、思つたように歩けません、今ま山を越へて野に移ろうとする谷合の處へさしかゝると『キユカ〳〵』と云ふ悲しい聲がするので、ふと見ると、大きな赤蛙が蛇に兩足を咬へられ、腹を太鼓のようにして悲鳴を擧げてゐるではありませんか、覺チアンは、

『ア、可哀想に、蛇もおいしい赤蛙だから喰べようとするのだろうが、喰べらるゝ赤蛙はどんなに、悲しい事だろう』

と、平常あはれみ深い覺チャンは、見るに忍びないと、飯りを急ぐのも忘れて、足元にあつた小石を取るなり、蛇を目掛けてなげ付けました、蛇は小石が岩角にあたつた音に驚いて『アクト』口を開くや、赤蛙うれしそうに、ヒヨコン〳〵とお禮をするように草の根方へ逃げて行きました。

【四】

覺チアンはマア是でよかつたと、一生懸命に道を急いで、野を通り越そうとする頃です、秋の日は委な西の山の端に隱して、四方は夕靄の即を張るのではありませんか。

『サアもう日は暮れた、サア大變だ、暗くなつた、お父さんお母さんが、サゾ心配して居

大僧正 本多日生師著
修法勤行の心得
目次
一、緒言……二、法華修行の目的……三、法華修行の作法……イ、勤請…ロ、修法…ハ、祈願文…ニ、回向文…ホ、受持文…
定價 一部 金十五錢 送料二錢
拾五部 特價金一圓(送料共)

大僧正 本多日生師著
宗教の五綱に就て
本誌に連載さし「國家の興隆と佛法の興隆」の結論なり。
定價 一部 金拾五錢 送料金二錢
拾五部 特價金一圓(送料共)

大僧正 本多日生師撰
法華經要文 改訂再版全文四段 總振假名付
布裝一部 金五十錢 送料二錢

笹川日堂撰
顯本宗年鑑
立正結社東京支部の爲に印刷されたもの、希望者に實費にて頒與す
一部 金三十錢 送料二錢

發行所 名古屋市東區田代町常樂寺
統一編輯局
振替名古屋一〇八一九

一切の勝利は人格に在り

本多日生

私は本多日生であります、一切の勝利は人格にあり、と題してお話を申上げるのであります。吾々人間は個人として考へても勝利者として世に立たねばならぬと思ひます、敗慘者として憐れなる終りを告ぐると云ふ事は人間として最も恥づべき事であります、又國家として考ふれば、その國が衰亡に歸すると云ふ事ほどあさましき事はありません、どうしても國家を有する以上は、益々國家本來の目的を達成しなければならない、それには國としても勝利者の位置に立つ事が大切であらうと存じます。

そうして人間が勝利者となるには、如何なる職業にあつても、如何なる方面に立つても、必ずや人格に基くものであると云ふ事が認めらるゝのであります。例へば經濟上よりして富をかち得る、それには種々なる手段方法がありませうけれども、歸する所は人格のない者は一時の成功をかち得ても、結局は失敗者たるを免れ得ないと存じます。又政治家として成功するにも、或は宗教家軍人役人色々な働きからして世の勝利者とならうとするにしても、歸着する所は人格にあると存じます。その反面に世の敗慘者たるものゝ事を考へますと、彼の養老院邊りに落込んで居る人は、或は宗教家の末路であつて憐れなる養老院の生活をする者もあれば、或者は代議士であり、辯護士であり、或は立派な富豪の家庭に育つたものが矢張り落込んで養老院の生活をして居るのであるが、それ等の總てに於て其原因は色々に分れ

て居る樣であるけれども、根本に遡つてその一貫せる所を見るならば、何れも人格に於て缺けた所があるのである。宗教家としてそこに人格に缺くる所があつて、くだらなく遊んで暮すとか、お寺の金を費ひ込んだとか、そう云ふような事に依つて次第々々に墮落して遂に養老院に行くのである。富豪の娘が落ち行くのも、矢張り自分が我儘であり、親切の考へがない、不正の事はやると云ふやうなことが重つて、遂に失敗しても救けて呉れる者がないやうになつて、養老院に行くのである。故に總ての數千人の養老院に落込んで居る者を見れば、それが人格上の缺陷を有しないものは一人もない。不親切であるとか、ノラクラである、不眞面目である、嘘つきであるとか、色々人格上の缺陷のあるものは、結局は養老院に落込んで敗惨者の恥をさらすのであります。その半面に世に成功者となり、勝利者となつて居るものは、如何なる方面から出たものでも、それは必

すや何處かに一種尊ぶべき人格を有する者である、職業上實業界の勝利者でも、陸海軍の軍人、政治家の成功者でも、皆その人格がその成功をかち得た事に歸着すると存じます。

國に就て考へても、その國家の盛衰興亡實に國民の人格に存するのである、皮相な考を以て見れば軍備上の如何により、經濟上の如何により、國は盛衰すると思えるけれども、その軍事上の勝負と云ふ事も國民の人格にあり、經濟上の勝負と云ふ事もみな之は國民の人格に歸着するのである。故に表面の觀察によれば國家興亡の原因は多々ありますけれども、押しつめて研究しますれば、國の盛衰興亡は實に國民の人格にありとして、國を思ふものは退いてその人格を養はなければならぬと思ふのであります。

武力の戰ひに於て勝敗を決するに就ては、戰術戰略の上に種々なる手段方法の講せらるゝ事は云ふ迄もないが、併し乍らその戰術の極意秘訣のある所は、結局その軍を構成する軍人の人格如何に存するのである、始めは戰ひ有利なものであつても、段々戰ひが熱して來て、能々相摩するに至つたならば、機械を超越して、最後はその軍人の人格が勝敗を決する力があると云ふ事は、何人も承知して居る事であるが、此武力の戰ひ程嚴肅なるものはありません、一切の事の勝敗は之が手本であると申してもよろしいのであります。

商賣等は彼れ是れカラクリをやつて一時をかち得るやうに試みるけれども、それは嘘である。矢張り武力の戰ひの如く、最後の最後は人格でなければ勝利を得ないと存じます。

私は近來深く感じた事があります、本年四月八日印度において、彼の有名なる印度復興の志士ガンヂイ氏が、國民を集めて講演をしたそうでありますが、私の友人が近頃歸つてその講演を直接聞いたと云つて話したのであります。彼は印度國民に告げて云ふに、印度の復活興隆を計らんとするにおいては、今直ちに武力を執つて起つても却つて一層壓迫を蒙るかも知れない。經濟上の競爭において勝利者たらんと焦つても、資本の上に、技術の上に、機械の上に、印度人が直ちに經濟上の勝利者たる事は望み少い事である。然らば如何にせば吾等の目的が達せらるゝか、之は印度人が各自に人格に返らなければならない。それには今より三千年の古へ大聖釋尊が今日を以て降誕されたのであるが、此大聖者は吾等印度人に告ぐるに、先づ汝等の心を正しうせよ、先づ汝等の人格を完成せよ、然らば爾等の幸福は得られん、そこに印度の興隆がある、如何なる國家にもせよ、その國を榮えさせようとならば退いて國民の人格を陶冶せよ、と云ふ事を五十年の久しきに亘つて淳々と說かれ、その敎は今尙殘つて居るのであるから、吾等が實に印度の復興を思ふならば、退いて大聖釋尊の敎にかへらなければならないぞ、と云ふ

事を熱心に講演いたしたそうである。私は此ガンヂイの着眼に共鳴する所のものであります。

吾々日本人が他より侮辱を受けて、爾等は劣等國民である、爾等は交際する資格のないものであると云はれた、之に對して吾々がその恥辱を脱して日本人の面目を發揮しようとするに於ては、如何にせば宜しいか、決して直ちに武力を執つて立つの、經濟力に依つてどうするの、と云つても望み少い事であるかも知れない。併し乍ら日本人が目醒めて、各々人格の訓練陶冶に歸つてその心を清くし、その人格を完成し、世界に最も優秀なる民族となつたならば、戰はなくて勝つ事が出來ると思ふ。どうしても人格であります。個人の勝利も人格であり、國家の勝利も人格であります。

然らばその人格は如何にして訓練し陶冶する事が出來るかと申しますれば、之は私は、どうしても東洋の文化に依り、吾等の先人が教へた所に依つて、人格を磨くがよいと存じます。東洋の哲學、東洋の道德、東洋の宗教、東洋の高等な精神文化は、吾々日本人の人格を研くに餘りある價値を持つて居ると存じます。寧ろ此點について日本人の人格に缺陷を生じたとするならば、之は東洋文明の價値を忘れて、紊りに他に憧れた結果であらうと存じます。

東洋文明には吾々の人格を研き上ぐる方法は頗る明瞭に相成つて居る、それは諸君の御承知の如く聖人の教へより考へても、かんながらの教へより考へても、佛の教より考へても同じ事である、即ち次の意味合がそこに示されて居るのであります。

それは人格に於ては第一基本人格を明にしなければならぬ、その基本人格は吾々の誠心を開く事である。人は各々天賦の良心を持つて居るのである。西洋の學問や、西洋の宗教によると、人格の本性がハッキリしない樣でありますけれども、東洋の教では頗る明瞭であります。聖人の教に「天生民を降せし

より、之に與ふるに仁義禮智の性を以てせざるなし」とあるが、人各々生れ乍らにして立派なものを持つて居るのである。孟子は「人の性は善なり」と云ふ事を力說絕叫した。我が惟神の教に依れば、日本民族は皆和魂と稱する尊いものを持つて居る、それに歷史的の訓練を加へたものが大和魂となつて現れ、日本人である以上和魂を有し、大和魂を有するから、その本性本質は立派なものと云はねでならぬ。佛の教に依つても、人は總て佛性を有すと申し、表面惡しき人もそれはうわッつらであつて、心の奥の本性は人各々善良である、佛性を有するものであると說くのであります。

そうして此教を徹底せしめて、その最もよき所の本性を誠心と稱して居るのであります、之を研き、之をひらけば、そこに人格の基本が成り立つのである。然らば如何にせばその基本人格は開かれるかと云へば、之は即ち宗教的の態度によるのであります。近來に至るまで此宗教的の態度と云ふことはいみ嫌ふ人もあつたやうでありますけれども、それは大なる誤解である。聖賢の教より見ても、維神の教よりみても、何れも宗教的の態度を奬勵して居る所のものであります。聖人の教に依れば、天道を敬ふ事に依つて人の誠が開かれ、惟神の教によれば、神明を敬ふ事に依りて人の誠が開かれるのである、先帝の御製に

眼に見えぬ神のこゝろにかよふこそ
ひとのこゝろのまことなりけれ
眼に見えぬ神にむかひて恥ぢざるは
人のこゝろのまことなりけり

くもりなき人のこゝろをちはやふる
神はさやかにてらし見るらん

斯の如く御製は最も明に吾々の誠心を開くには神明を敬ふにありと、惟神の精髓を傳へ給ふて居るのであります。教育者でも、文部省でも、彼樣な事には

反對せらるべき筋合はないと考へる。

即ち誠心を開く方法は宗教的態度である、聖人の教に依つて天道を思ひ、惟神の道に依りて神を敬ふ事がなかつたならば、人の心の誠は開かれない。又佛の教に基けば、皆信仰をもととして、總て誠心が開かれる事を教へて居るので、若し信仰を失つたならば、一切の道德は燒き盡されてしまふと說かれて居る。そしてその信仰は人間の誠心を開いて行くことであるが、只宗教の信仰はそこに具体的の尊敬者を有して、確固として誠心を開く意味合が、他の教よりも正確である點に於て少し違ふ丈けで、寧ろ違ふと云ふよりは完成して居るもので、聖人の天を敬ふ心、惟神の神を敬ふ心を鍊錬した所に宗教的信念がある。それ故に道德上から見ても、宗教上から見ても、人格の基本を養ふのは宗教的の態度であります。

廣く天地を望んで、仰いで天に恥ぢず、伏して地に恥ぢず、更に宗教的の態度に依つて我心を訓練すれば、必ずや人間の誠心は開かれて來るのである。そうしてその誠心が一度開かれたならば、それに附髓して凡ゆる方面の人格は完成を告げる。心だに誠あれば何事もなるものぞかしと先帝の仰せられたように、一の誠は何事をも完成する力を持つて居る、即ち智仁勇の三方面を備へて居るので、誠ある者はその事に當つてそこに適當の判斷が生れて來るのである。

誠ある者は必ず親切の心が現れて來る、誠あるものは必ずや相手の者を救けやうとする精神が現れる。誠あるものは勇氣となる、至誠にして動せざるものは未だ皆て非ず、と孟子は說いて居るが、左樣にして基本人格が研かれ、人格の智仁勇が完成したならば、必ず立派な人が出來る、そうして今の所謂學問に云ふ良智良能の說の如く、餘り深く研究しなくても誠心ある人は自ら適當の方法を現はす、その事は軍人などについて考ふれば頗る明かであつて、軍隊で見まするとと、大した教育はなくとも立派な軍人の任務を盡す者が多い。吾々宗教家の中でも學問がよくあるから立派な宗教家になるかと云ふと、私は數十年管長の職を務めて多くの僧侶を支配して居るけれども、必ずしも學問の多い少いは關係が極めて僅であると思ひます。人格のある者であつたなれば、必ずやその仕事を達成する事が出來る。どうしても之は日本に於て人を求むる方法を改めて、試驗の方法も革めて、學術と技藝を第二において、試驗の點數等は人格を以て之を採り、會社で人物を採用するにも、役人が任免黜陟をやるにも、人格を本としなければならぬと思ふ。或は政治上の選擧運動についても、其政治家を選擧する目標は實に人格を目標に置いて、その人を推すやうにしなければならぬ。色々の手段方法に依つて人物が選拔される間はその國は決して興隆するものでないと信ずる。

今晩私がお話を申し上ぐる所の一切の勝利は人格にありと云ふことは、殆んど自明の事柄で、何等の說明を要しない程のことである、天氣のよい日に天氣であると云ふが如き事柄で、云はずもがなの事であるけれども、今日の同胞國民の間には、口に人格を說いても、徹底的に個人の興廢國家の存亡、實に人格にあると云ふことは深く考へられて居ないやうである。近頃伊太利が非常な勢ひを以て努力奮鬪して居る事を聞いたが、伊太利の青年は確に人格的に覺醒して居るやうに思ひます。

日本の同胞國民は色々の方面に人格上に於て未だ目醒めないものがあるかと思ふので、それで彼樣なことを申上げたのでありますが、只私は個人の勝敗國家の興亡人格にありと云ふことを御記憶願へば、此目的を達し得たのであります。

之で私の講演は終りといたします。

（名古屋放送局より放送）

教義信條の整束

本多日生

五、道　義（智恩報恩の實行）

次には道義である。これも日蓮教學上の道德に關する思想教訓は頗る豐富なことであるが、その中に於てどこに纏りをつけるが宜いかといふと、それは知恩、報恩の實行といふ點であらうと思ふ、恩を知り恩を報ゆることを事實に行つて行くのである。先づ恩を知るといふことが大事なのである、唯だ報恩といつても恩の心得方が狹かつたり、顚倒して居つては役に立たぬ、恩のあるところを明かにしてこれに報答をする、そこが佛法の敎ゆる點、殊に日蓮敎學のやかましくいふ點である。唯だ報恩々々と云つて恩を受けたる者に恩を報ゆるといつても、それは輕重本末が明かにならなければ役に立たない。

例へば社會相互の恩をやかましく言つて、共存共榮といふことが非常に宜しいといふ風にのみ言つて、それで忠孝の道德を忘れるならば、これは間違つた事である。又忠孝の道德が宜しいといふ事のみを力說して、天地の偉大なる惠みを忘れるのはいけない、假令日本人と雖も、單に忠孝道德あるを知つて天地の惠みがわからんやうな者は駄目である。それ故に有恩の處を明かにしなければならない、これが佛陀の說敎の心髓である。

そこで恩はすべて忘れてはならないのであるけれども、先づ大小を先きに考へなければならない、小恩、大恩といふことを分類して行くのである。そこで世間で色々人の世話になつたやうな事などは、例へば旅をして人の世話になつたとか、奉公をして親切にして貰つたとか、社會的の善敎濟のやうな事柄に於て恩を受けて居るといふやうなのは、總て一と束にしてそれは所謂社會相互恩といふ一つの事に纏めあげて考へて行けば大恩となるけれども、それを一つ〳〵切り離せば小恩として考へるのである。然らば大恩とは何かといへば、第一が「父母の恩」、第二が「國王の恩」、第三が「衆生の恩」、即ち相互の恩である、第四が「三寶の恩」、これを四恩と稱して居るが、更に六恩ぐらゐ迄のばしても宜いかと思ふ、六恩とは今の四恩に加へるに夫婦互に恩ありといふ「夫婦の恩」、即ち夫から言へば妻を恩として考へる、妻は夫を恩として考へる、モウ一つは「師匠の恩」である、斯ういふことが佛法に於ては明かに示されて居る。これを十大恩として說く場合もあるけれども、先づ六つ位のところが最も宜からうと思ふ。夫婦の問題も隨分今日は男女關係が面倒になつて來る時代であるから、夫婦互に恩ありといふやうなことは、やはり盛んに敎へた方が宜いと思ふ。

そこで恩を知るといふことは、子としては父母の恩を知り、國民としては國王の恩を知り、人類としては社會の相互共存共榮の恩を知り、又天地の間に居る自己としては天地の恩を知り、その天地の恩を現すものが神佛であるから、佛法でいへば三寶の恩、殊に佛樣の御恩を考へる。それから夫婦互に恩あることを知り、さうして師匠に對する恩を知る、これは人間は色々の事をみな敎はるのであるから、さういふ敎育敎化を受けたところの恩義を重んじて、自からそこに道德が完備して行くのである。家庭に於ては父母を大切にし、社會に於ては相互が恩義を感謝し合つて行く、互に感謝の生活をする。國民としては國家及び國王の恩に感謝をして行き、人類の一員としては天地の惠みに感謝する、夫婦は互に恩義を知つて有難く思つて暮して行く、弟子は師匠を

大切にするといふことになると、餘程美しい人生が現れて來るのである。これは西洋の文化から借りて來るのでなければ、儒教や神道から借りるのではない、佛教特有の教義であつて、世界の人類に教ふべき大なる道德觀である。故に日蓮教學から導かれたその信念が、歡喜の中から善を行はうとするには、その歡喜から「誰が御恩のある人ぢや」といふことを考へて、父母の恩、國王の恩、衆生の恩、三寶の恩、夫婦の恩、師匠の恩、といふ六つ位の恩は直ちに胸に浮び起つて、さうしてその恩に報ゆる行動を實際に取つて行くといふことが大事であらうと思ふ。

日蓮聖人の御遺文では、先づ『四恩鈔』といふのに四恩が擧げられて居るが、それは非常に能く說いてある。それから『報恩鈔』といふ有名な御遺文があるが、その中で自分は殊に報恩鈔の始めのところを記憶してよからうと思ふ。

夫れ老狐は塚をあとにせず、白龜は毛寶が恩を報ず。畜生すらかくの如し、況んや人倫をや。如何に況んや佛教をならはん者父母、師匠、國の恩を忘るべしや。（一編一四五一頁）

と斯う三段式に報恩のことを書かれた。狐でさへも親の恩を忘れないで、死ぬ時分には自分が產んで貰つた穴の方に足を向けては死なぬといふのである。人間が親の恩を忘れるやうなことではいかん、況んや佛法を學ぶ者が報恩の道德を忘れるやうなことでどうするかと言はれた。この「畜生すら尙ほ恩を報ず、況んや人倫をや。如何に況んや佛法を習はん者をや」といふ順序を始終頭腦に置いて置かなければならぬ。「俺は坊主になつたのだから親の恩などは構はんのぢや」「俺は坊主になつたのぢやから國家社會の盛衰などは眼中に置かん」さういふことはいかん、左樣な者を師匠として國民を導いたならば、不具者ばかり出來てしまふのである。

又國家教育の方に於ては、何時までも我見、我執を以て國民道德は忠孝倫理のみで事足りるやうに言つて居るけれども、その言ひ方は缺けた所がある。日本の道德としては忠孝倫理のみを重く考へて來たけれども、社會の恩を忘れた譯ではなかつたのである、唯だその宣傳が足らなかつた。又神を敬ふ心がなかつた譯でもないのであるから、やはり天地の恩、社會の恩、夫婦の恩、師匠の恩といふことを併せて說く方が宜しいのであつて、何時までも固執して「忠孝さへあれば宜しい」と言つて行くことはどういふものであらうか、そこに反省の餘地があらうと思ふ。社會を今日の如く混亂に陷らしめるといふことは、忠孝倫理のみを力說する人にもその科ありと言はなければならぬのではないかと思ふのである。

六、護　法（衣座室の三軌）

次には護法といふ事である。これは道義の一種であるけれども、宗教生活をする上に於ては、この四恩の中にある三寶の恩からして考へると、佛法を興隆するといふことが非常な大事なことになつて來るのである。國家の爲にも立正安國であつて、法衰へれば國は健全に發達をしない、法が盛にならんければ國民の人格が頽廢をし、思想が惡化をし、隨つて國運が衰頽して理想的の發達を遂げることが出來ない。又大勢の人々を愛する點から考へても、敎を通さずして人を救うといふことは出來ない。牡丹餅で救ふとか馬鈴薯で救ふとかいふことは一時の救濟であつて本當の救ひにはならん、どうしても人を救ふといふ一番の親しは、その人々の心を救はなければならぬ、それは佛法のやうな敎を以て、即ち精神生活を心得しめなければならぬ。牡丹餅や蕎麥を喰はしたところが、その時だけは喜んでも直ぐに腹が減つてしまふのである、精神に法悅の歡喜を與へれば、如何なる境遇に惱める者も各々飽滿したる幸福を味はふことが出來る。であるから一切の政治や社

會事業や、それ等の仕事を超越して正法を興隆することが一番大切である。これは印度の阿育大王が八萬四千の塔を建立せられたが、この碑文の何れにも書いて居られるが如くに、正法を宣傳するは人中の最勝事である、華は澤山あるけれども蓮の華が最も美しいが如く、善い仕事は澤山あるが正法を外護し、正法を宣傳することが人間行爲の中の最上の價値を持つものぢやといふことをどの碑文にも記されたのである。その點は法華經の法師品を始めとして、この法華經を一人の爲めに說くすら如來の使ひであると示され、日蓮聖人一代の敎訓の中にも正法を外護し、正法を發揚せよと吳れ〳〵もお說きになつて居るからして、そこを能く心得て護法の勵行を立てなければならぬ。

その中で何が最も大事な心得になるかといふと、その敎訓は法師品に說かれた所謂衣座室の三軌であらうと思ふ。

若し善男子、善女人有りて、如來の滅後に、四衆の爲に是の法華經を說かんと欲せば、云何が應に說くべき。是の善男子、善女人は、如來の室に入り、如來の衣を着、如來の座に坐して、爾して乃し應に四衆の爲に廣く斯の經を說くべし。如來の室とは一切衆生の中の大慈悲心是なり。如來の衣とは、柔和忍辱の心是なり。如來の座とは、一切法空是なり。是の中に安住して、然して後に不懈怠の心を以て、諸の菩薩及び四衆の爲に廣く此の法華經を說くべし。

即ちこの法華經を說かんとする者は、如來の室に入り、如來の衣を着、如來の座に坐して、不懈怠の心を以てこの法華經を弘めなければならないといふことが示されて居る。その如來の室といふのは何であるか、これは實に法華經の敎訓の貴いところである。或る時キリスト敎の學者達の寄つて居るところで私はこの話を申述べたことがあります、これ等の人達も敬服をして居つた、「さういふ結構な敎訓が佛敎の中にあるといふことは、洵に感服に價ひする」といふことを申して居つたのでありますが、如來の室とは一切衆生の中の慈悲心これである。佛樣の御座る室に入つて行つて、それから法華經を說くといふのであるが、その佛樣の御座る室といふのは何處であるか、別段靈鷲山に參拜する樣でもなく、佛墳の中に入る譯でもないのであつて、如來の當にお居でなさる室といふのは汝等の心の內である。併しその心の內に大慈悲の心が動かなければ、佛は汝の心から外に出ておしまひなさる、汝等の心の內に大慈悲の心が動けばそこに佛はちやんとお出でなさるといふのである。この佛が心の內に御座るといふことも、理窟で唯だ我れに佛性を持つて居るとか、佛心があるとか、是心是佛とかいふ禪宗で言ふやうな、さういふ理論上のことは價値がないのである、さういふ機械的のことは學者輩はえらいことのやうに言ふけれども、それは朝飯前のことである。さうでなくこの自分の心の內に親切の心が動くと、そこにちやんと絕對人格の佛樣が來てお居でなされるといふ、この精神的に感激的に考へるところに尊さがあるのである。それを理窟めいて「別段佛は外に居るものではない、俺の心の中に居る、俺の心で善い事をしようと思へばそれが佛樣ぢや」といふやうな禪宗坊さんの說法などは、これは佛法を淺く解釋して居るものである。又近來の學者が「內在の神」などと言つて解釋して居るのも、皆な宗敎の妙味を知らぬ淺薄なる知識の產物であるといふことを私は斷言して置く。法華經はさうではない、「如來の室とは一切衆生の中の大慈悲心これなり」、これにはキリスト敎の人も實に敬意を拂つて居るのである「ナントどうもうまい說き方のものぢやナ」と言つて、涎を流して居る。然るに法華宗の人はさういふ意味合を廣く宣傳しない。

その次の如來の衣といふのは何かといへば、これは柔和忍辱の心である。如來の衣を着るといふのは、今の坊さんが着て居るやうな袈裟や衣をうけついで來るといふことではない、着て居る物は羽織であらうが洋服であらうが、そんな外部の事をいふのではない、働く心が柔和、忍辱、即ち柔らいだ精神になつて、さうしてどんな困難な事でもそれに堪えて行く。「忍辱」といふのは單に消極的に、罵られても腹を立てんといふことだけではない、作し難き事を能く作すといふことが忍辱であると佛教では解釋されてある。即ち「忍」といふことが消極、積極兩方面にあるのである、暑い時分に暑さをこらへて山へ登つて行く、その暑さをこらへるといふことは消極的のやうだけれども、その暑い中をへこたれずして高い山に登つて行くといふ、その積極的の行動が「忍」といふ字で現はされるのであるから、そこで柔らいだる精神から出て剛健なる活動に移る。丁度日蓮聖人が「日蓮が悲嘆大ならば」と言ひ「鳥と蟲とは鳴けども涙おちず、日蓮は泣かねども涙でひまなし」といふやさしい心を基として、さうして現れたる所の剛健、如何なる恐ろしい法難に遭つても少しも驚かない師子王の如き心となつたが如く、その慈悲の心が基礎となつて、その上に如何なるものとも闘ひ得るところの健闘の精神が現れて來るのである、柔和忍辱の心といふのは即ちそれである。先師常樂院日經上人は、幾度か法難に遭つて耳を切られ鼻を切られて非常に醜い姿になつしまつた、それでも法華經を宣傳しようと思つたけれども、耳を二つ除られてしまふと人間の顔の格好は變なものになつてしまふ、おまけに鼻を切られてしまへば顔の調子もすつかり變るし、人相といふものがまるで變つてしまふ。斯ういふ顔を人の前に曝して法華經の教義を宣傳するといふことは、恥かしいやうな氣もする、これ限り法華經の宣傳を廢めてしまはうかとも考へたけれども、この法師品の經文に思ひ當つて、イヤ〳〵さうではない、如來の衣を着るとは柔和忍辱の心これなり、衆生を救はんとする柔和の心は日經の胸から離れては居らない、この柔和の心が強ければ忍辱の衣となつて、この恥をも忍んで積極的に法華經の宣傳をしなければならぬと言つて、法難以後に五十三箇寺の寺院を建設せられた位に熱心に教を弘められた。この統一闘と連繋して活動して居る牛込の常樂寺の如きは、即ち日經聖人が建てられた寺である、常樂院日經これを建るが故に常樂寺といふ寺號となつて居るのである。今名古屋に於て專ら宣傳に從事して居る寺もやはり常樂寺といふのである、大阪に於て中心となつて働いて居る蓮成寺といふのも、開基は表面は違つて居るけれどもやはり日經聖人の建てられた寺である、堂閣寺といふ寺もやはり日經聖人の建設せられたものである。耳鼻を削がれてから後に五十三箇寺を建てられた、その柔和の心即健闘の精神であるといふことが洵に能くわかるのである。佛法を信ずる者は唯だ消極的に、どんな惡口をいはれても恥を忍んで家に引込んで、マア〳〵腹は立つけれども家に寝てさへ居れば間違ひはないと言つて、ムク〳〵する精神を抱へた盡布團を被つて寝て居れといふのではない、この柔和の精神より健闘の精神が湧き出る、それを佛の衣を着て居る人といふのである。だから柔和忍辱の布團とは書いてない、「忍辱の鎧」と書いてある、鎧といふのと布團といふのとの違ひを明白に心得たら宜からうと思ふ。

次に如來の座に坐するといふ、その如來の座といふのは一切法空これなりとある。これはどういふ意味かといへば、小さな事柄に精神を囚はれない事をいふのである。一切の事を推し究めて見れば小さな我見我執を起す必要はない、大抵のことはどうでも宜いやうなことが多いのである、大切な事柄といふものは押し究めればさう澤山あるものではない。能

くちよつとしたことで「俺の顔を潰した」ナンと言つて腹を立てる人がある、さういふ人は又よく直きに顔を潰されるので、「俺の顔を潰した」とか「俺の鼻を凹ました」とか言ふ、けれども本當の人間は、そんなに人が少々ぐらゐ惡口を言うたとか、少々ぐらゐのことで顔が潰れたり鼻が凹んだりするものではない、そこを言ふのである。一切法空に住したならば、さういふけちなことでは精神を動かすことはない、自分の主義主張は大なる御佛の精神に依つて働いて居るのであるからして、自分がどう言はれる斯う言はれるといふ位のことはどうでも宜い、どうぞ御佛の思召が世に弘まつて行けば宜いといふ大きな精神に立つのである。その點に至ると今日の宗教的感情すらも間違つて居ることである、その他それ以下の小さい事柄を省なく放棄して、所謂堂々たる天空、快闊の精神を以てこの法を說けよと仰せられたのである。

この三點である、心に大慈悲を湛へ、柔和忍辱を持し、さうして一切法空の四はれざる公平無私の精神を以てこの法華經を弘めて行くといふことが、護法の心得の中に於ては一番大切なことである。今日割合に坊さんや又在家の信仰のある人が我執が強くなつて居ることは、これは信仰から出て來る副產物であつて、已むを得んことではあるけれども、餘程注意しなければならぬことである。信心が固まると直ぐにそこに所謂我見といふものを生ずる、それが宗教の弊を生むのであつて、今日各宗が分立して居つて少しもそれが進境を見ない、融合を見ない、殘るものは唯だ我見のみである、誠に愧づべきことである。これは即ち如來の座を離れて修羅の座に坐して居るが故にさういふことが起るのである、本當に道を求める精神が乏しいやうに自分は考へるのである。

七、得益（二世安穩の法樂）

次は得益に關してゞあるが、これは二世安穩の法樂といふことが大切な點である。信心をする御利益といふものは決して小さく考へてはいけないのである、現在生活の中に於ては法悅歡喜の力に依つて、如何なる事に遭遇しても、疾病に出會はうが、不幸なことに出會はうが、夫と離れようが妻と別れようが、悲しい事は次から次と人生に起るけれども、その悲嘆やる瀨なき人生に處しても、信仰の力を以て幸福を失はんやうにして行く所に、現在生活の御利益はあるのである。それが色々の事に現はれて行く、悲しい場合には慰めの力となり、怠ける場合には鞭撻の力となり、肝癪の場合には精神を鎭める力となるといふ風に、丁度彼の無量義經に說いてあるが如く、その人々の人格の缺點を補正して、さうして間違の少ない人生を送ることが出來るのが現在の御利益である。さういふ風に考へなければいかん、信心をいきなり小さな事に引きつけて「あなたの信心は病氣に利きますか……」そういふことを言ふのは迷信であつて、無論病氣にも利かんとは言へないけれども、病氣に就ての心得といふものは別にある、病氣になつたならば藥を飲んで養生をして、精神を平和に保つて、どんな事があつても狼狽へないといふことになれば、惡る病氣は惡る、併し惡らぬ病氣は仕方がない。人間は如何なることを信じても死ぬ時には死ぬのである、それを「信心して居つても死ぬといふのは、そんな信心は當てにならぬ」といふのは我武者羅といふのである、そんな馬鹿なことはいかん。それは場合に依つて、例へば非常に神經的な病人で、藥のまわりが惡くて病氣が惡らんといふやうな者は、それは信心をして精神の平和を得て藥が利けば助かる者もあるけれども、絕對に人間が宗教を信ずれば死なぬといふものではない、どうしても人間は或る年齡を經過すれば人生の終りに達するといふことを認めなければならぬ。眞の御利益は前

に申したやうな意味である。

それから未來の利益は臨終の刹那を期して成佛するのである、死んでからマゴ〳〵するのではない。或は淨土宗でいふやうに西方十萬億の淨土に行つて蓮華の中に十二大劫もぢつとして居るといふ、それは地獄で苦しむよりは少しは樂かも知らんけれども、蓮華の華の中に押しこめられて十二大劫もぢつとして居るナンといふことは隨分氣の永い話で、吾輩などは迚もそんな所では辛抱が出來ないと思ふ。香ひは好いかも知らんけれども、華の臺に十二大劫ナンと云ふことは、善かれ惡しかれ御免蒙むらなければならぬ。或はキリスト教でいふやうに、死んだら神の審判を受けるといふけれども、それが何時のことだかわからん、世界の終りまで一緒に溜めて置いて一遍に審判をするといふ、妙な事を言つたものだ、一人々々裁いて貰はなければ困る。それも今の日本の判判所のやうに、一つの裁判をすると第二回の公判は三箇月も延ばすといふやうなことをやられては困る、死んだら即刻定めて貰はなければならぬ。所が眞の佛法といふものは今申す通り臨終の刹那を期してといふて、呼吸を引きとるその刹那――刹那といふのは一彈指といつて一秒を六十二に割つた時間であるからホンの一瞬間、言ひやうのない早さである。その早さに佛に成る者は佛に成り、地獄に行く者はビューッと吃りを發して墮ちてしまふといふことになるのである。即ち未來に於ては刹那の間に佛身を成就する。この現在の願望も未來の願望も併せてこれを滿たす、即ち世間の樂および涅槃の樂を與へるのである。

その意味を最も簡潔に現したのは藥王品の

其の願を充滿せしむること、清涼の池の能く一切の諸の渴乏の者を滿すが如く（中略）能く衆生をして一切の苦一切の病痛を離れ能く一切生死の縛を解かしめたまふ。

といふ文であると思ふ。この人生の一切の苦しみを除き、そうして永遠に對する生死の羈を切つて佛樣にして戴くといふ、現當二世の諸願滿足といふことが得益の心得方である。「あなたの方の信心は何に利くか、厄除けか」「お前さんの方は安產か」といふやうな、そんな賣藥の小賣みたやうなものはいかん。宗教信仰の利益といふものは、現在には今申す法悅の生活に入つて一切の苦痛を擊破する力を受け、死後は刹那の間に佛身を成就するといふ所に於て、日蓮教學の信仰は教へられて居るものである。それを少しでも遠慮してはいかん、「どうもそれでは餘り上等過ぎるから……」といふやうなことを言ふ人があるけれども、宗教といふものは絕對のものを握るのであるから遠慮は要らない、「絕對の本佛などは餘り上等過ぎる、鬼子母神樣ぐらゐの所でやつて置かう」「署長さんでは恐れ入るからマア警部補ぐらいの所で……」そんなことを言ふべきものではない。宗教は絕對に向つて、願望を完全に打ち立てゝ、さうして「充滿其願」のこらすその願を充滿せしむることでなければならぬ。

八、警策（信心不退の警策）

次は警策でありまして、これは色々御警めのこともありますけれども、就中信心不退の警策が一番大事である。信心の本當に成立つたものは退轉すべき性質のものではないのであるけれども、どうも人間の弱點といふものは、ともすれば信仰が緩み勝ちになる。一旦定めた信念が日を遂ふて益々鞏固になり、益々發達をすると極つて居るものならば、これ程安心なことはないけれども、餘程つよく確かり定めたと思つても、日を經るに從つて漸らいで來るものである。尤も人間といふものはどんな感情でも薄らぐのであつて、兎角永續しないものである。非常に景色が好いと思つて富士の山を見ても、二日も三日も

見て居ると「モウ富士も見あきた、何處かほかへ行かう」といふやうなことを言ひ出す。非常に氣に入つた女房を貰つて、モウ貰つてから五年にもなると、始めは一緒になれなければ首を縊るといふたやうな者でも、些つとは餘所に行つて呉れた方が宜しい、「今日は朝から家内が居ませんので清々して居ります」といふやうなことになるのである、さういふ人間の續き易き欲望でさへも續きにくいものである。非常に豆腐が好きだといふ者でも、三度續けさまに豆腐ばかり喰はせれば「モウ勘弁して呉れ」といふやうなものであるから、有難い佛法ではあるけれども、さて熱心に信心をして教義も心得、信仰も續いた者が、「マア〳〵これで大體わかつた、信心も決定つたから」といふので會合にも出ないで居る、それは自分は確かりした積りで居るけれども、その内に氣が抜けてしまふ。丁度ゴム風船に一パイ空氣を吹きこんだ積りで居るけれども、一日か二日經つて出して見るとゴム風船がグシャッと痿びてしまつて居る。そんな譯でえらい信心が出來上つて遅いて居るものかと思つたら、何時の間にか脱けてしまつて居るといふ事がどうも多いやうに思はれる、これは實に悲しい事である。どうしても時々に策勵鞭撻を加へなければいけない、その一旦定めた信仰はモウ佛に成るまで續くといふ強いものであるけれども、尚ほ且つそれを鞭撻して行かなければならぬ、これは非常に大切な事だと思ふ。

それに就ての日蓮聖人の御教訓は數多いことでありますけれども、これに就ては二つの聖訓を記憶して置きたいと思ふ。一つは

魚の子は多けれども魚となるは少なく、菴羅樹の花は多くさけども果になるは少なし。人も亦此の如し、菩提心を發す人は多けれども、退せず實の道に入る者は少なし。（松野殿御返事）

と稱せられた。魚の子が生れた時分には澤山ウヨウヨして居るけれども、その鯉なら鯉が立派に成長して、龍門の瀧を登つて龍に成るといふものは非常に少ないのである。菴羅樹の花といふのはどういふ花か知らんけれども、澤山花が咲いても容易に果がならないといふ、さういふ風に一時ワーッと來た信者は澤山居るやうであるけれども、皆な無駄花になつて散つてしまふ、本當の菩提心を貫徹する者は少ないといふことを仰せられた。これは元々お經に說いてあるお釋迦のお言葉である、だから菴羅樹といふやうな言葉が出て來る、これは華嚴經に出て居る言葉を日蓮聖人が引かれたのである。魚の子は多いけれども魚となるは少なく、菴羅樹の花は多く咲けども果になるは少ないといふ、この警策を始終考へないと「イヤもう俺は熱心に信心をして居る、お前等よりは餘程古いのぢや」といふやうなことを言ひ出したならば、その人は危ないのである、その時分には「あなたは成る程古いだらうけれども、魚の子は多けれども……ぢやありませんか」といふ、この聖訓を以て答へる人でなければならぬ。モウ一つは從來說教の終りに必ず坊さんが讀んだ聖訓であるが、これは私は餘程よろしいと思ふ。それは

信心弱く候らはゞ峯の石の谷へころび、天の雨の大地へおつると思召せ、大阿鼻地獄は疑ひあるべからず。その時日蓮はし怨みさせ給ふな、かへす〳〵も各々の信心に依るべく候なり。南無妙法蓮華經。

これがなか〳〵急所を突いて居る、信心はして居るけれども、信心が弱くては駄目ぢやと言はれるのである。信心々々と言つても何時の間にか空氣が抜けて居れば、それは信者顔をして居つても峯の石が谷底へゴロ〳〵ッと轉げ落ち、天の雨がみな大地に落ちるやうに、死んだら大阿鼻地獄に行つてしまふといふ。その時日蓮を怨んで「法華を信じて居つたのにこんな所に轉げて來ました」と言つても俺は知

らんぞ、お前の信心が弱いからさういふことになるのだと仰せられた。だから信心の退轉といふことを最も警めなければならぬ、人各々信心の強弱といふ事がある、法華經を信ずるといつても信弱ければ駄目である。始めの頃の聖訓は一生に一遍唱へたら宜いといふやうなお言葉もあるけれども、本當の教訓の場合に於ては、信心弱ければ峯の石の谷にころぶと思し召せと仰せられて居る、これを能く考へなければいかん。「チーニ法華の信心は樂なものです、一期生に一遍唱へたら宜いのですから、私なんぞは何十萬遍唱へて居るかわかりません」といふやうなことを言ひ居る人は、ゴロ〳〵と行く連中である。

この警策を常に心得て置かなければならぬ、どうも私は信者の中には大分信仰が進んだ者が、何時の間にか氣の拔ける人があるかと思ふ、殊に東京にはさういふ氣風の人が多いやうに思はれる。「大阿鼻地獄は疑ひある可からず」といふやうなことに相成つては洵に氣の毒なことでありますから、どうぞ諸君はそれ〴〵の仕事も忙がしいでありませうが、又時間を刻出して込み合ふ電車に乘つて集まるといふことも容易でなからうけれども、それだけの都合をつけて法を聽くといふことが廣大なる功德を成就する所以であるといふことをお考へになつて、間斷なく法を聽き、益々信仰增進に努められんことを希望する次第であります。

大僧止　本多日生師著

教義信條の整束

修法勤行の心得

定價（一部金拾五錢送料金二錢）（拾五部金壹圓（送料共））

名古屋市東區田代町字城山

發行所　統一編輯局

振替名古屋一〇八一九

ある日の佛さまの獨り言

古田昂生

——如是我聞——

外はさらりとした秋らしい氣分になつたやうだ。今朝も、雀が、元氣にまかせて、この本堂へ飛び込み、狼狽して姦しく「チュー、チュー」と鳴いた揚句、塲臺を倒すやら、このわしにまで小便をひつかけるやら、あゝこれも陽氣のせいだらう。

けど、あの狼へ雀奴が、碧子にぶつかつて「ガアン」と音がしたのには吃驚驚天して小さな眼をパチクリしてたのは大突はせだつた。

然し、雀のことばかりは云つてはゐられない。手近な人間が恰度あの狼へ雀だ。

陽氣がよくなつてピクニックに都合のよい時になると、ゾロ〳〵と善男善女が、このわしの顏を拜みに來るが、あれは一體どうゆう氣だか判らない。若い者が音樂會やら歌劇やらを觀にゆくのを名譽にしてゐるやうに、あの善男善女はわしのところへ來るのを名譽にしてゐる。そのくせ腹の中で勝手なことばかり賴んで、このわしを何んと思つてゐるのだらう。わしは金のなる木でも、夫婦喧嘩の仲裁を職業にしてゐるものでもない。

その善男善女が、和尙から本堂普新やら法要やらで布施を勸進させられると驚天して「あの、他の方はどの位でムいましたか」など聞くに至つては、寺院や僧侶に布施するのに町費の割合とでも思つてるらしい。

善男善女もさうだが、僧侶も僧侶だ、僧侶は職業の一種で、わしを商品だと思つてゐる。

葬式、法事は今の僧侶の仕事の始んどだ、そうして、何か社會事業をやらうとする僧侶があると、彼等は先づ自己宣傳より始める。眞劍にコツ〳〵と身を以つて愛のピラミットを建設しやうとする者など

は滅多にありやしない。説教を始める。いゝ加減なことばかしを喋舌つてゐる。お經をよんで居乍ら、その經義を眞當に理解する者もない。

このわしなどが思つても見ないことを、さもわしが云つたやうに云つてゐる。亦、それに涙を流して嬉んで聽いてゐる者もある。末法流轉ぢや。

殊にこの頃、若い者が宗教の論戰をやる。これが流行のやうに盛んにやる。馬鹿ナ。宗教はそんな輕卒なものでないぞ。

總ての者はわしの顏を見よ。わしの顏には「何にも知らん」と書いてある。

わしは何も知らん、わしはたゞわしだ。

どうも、こんないゝ時候になると、腰が落ちつかぬ。氣がふわ〳〵して、こんな冷い間いとこには辛抱が出來ぬ。

そこいらでも散歩して來やうかなア。おい、何人お詣りに來ても、わしの氣はもうわしから放れてどこかで遊んでゐるで、知らんぞ。人間共がゴシヤゴシヤと爭ひ、嬉び、悲しみ、笑つてゐるところを靜かに見て歩く方がどの位愉快か判らん。あゝ、いゝ陽氣だなア。では左樣なら。

蓄音器
レコード

大僧正本多日生猊下吹込
一、宗教信仰ノ必要
一、佛教信仰ノ歸結
一、佛教ノ卓越セル所以、
一、聖語
二枚四組二圓四十錢（外ニ送料三十錢）
取次所　名古屋市東區田代町城山　統一編輯局
振替名古屋一〇八一九

法華經要文講義

普賢菩薩勸發品第二十八

本多日生

これは法華經が將に終らんとするに方つて、普賢菩薩が東方より現はれ來つて、さうして再び法華經を說いて戴きたいといふ事をお願ひするのであります。「勸發」といふのは即ち佛にお勸めして、發起人となつて、更に法華經を說き給へといふことを願つたのであります。所が釋尊はその請を容れて、法華經の要點を再び纏めてお說きになつた、それがこの品の要旨であります。その纏められたのが一七七の所に現はれて居る四法成就である。

一七七、佛普賢菩薩に告げたまはく、若し善男子善女人四法を成就せば、如來の滅後に於て當に是の法華經を得べし、一には諸佛に護念せらるゝことを得、二には諸の德本を植ゑ、三には正定聚に入り、四には一切衆生を救ふの心を發せるなり。

これは即ち法華經を纏めて說かれた四法成就の文で、釋尊が普賢菩薩に告げて仰しやるには、善男子善女人が四つの事柄を成就したならば、如來の滅後に於てこの法華經を得られる。といふのは、一は諸佛に護念せられる事――これは無論開顯の眼から言へば、本佛に護られる事である、諸佛と分ければそれは迹佛であるけれども、之れを本佛に歸すれば統

一の釋尊である。流通の一段は迹門に還つて說くといふことは、法華經解釋の網格になつて居る、「涌出寶量の二品を除いては皆始成を存せり」といふのは、斯ういふ言葉があるから、『開目鈔』に日蓮聖人がちやんと斷つたのであります、そんな事も日蓮敎學としては極つて居る事である、だから無量義經に於て、「是の經は本と諸佛の室宅の中より來る」と言つても、それは寶量品の顯本を經たならば、モウ一度立返つて、文は無量義經に在りと雖も義は寶量品に在りで、寶量品の經意を以て之れを解釋して、諸佛の室宅は本佛の大慈悲より來るといふことに解釋するのが、聖本法華といふことである。法華經一部を顯本の趣旨に依つて解釋する、寶量品だけが顯本といふのではない、その中心の敎義から、一切を統一して解釋することを顯本法華といふのである。この顯本法華といふことが日蓮聖人の主張である、「發迹顯本せざれば實の一念三千もあらはれず、二乘作佛も定まらず」と開目鈔に言はれたのはそれである。顯本法華宗といふのはたゞ一つの日蓮門下の一分派だといふやうな事に考へて居るが、さうではない、顯本法華が日蓮の主張した法華經である。それは形から言へば顯本法華宗は分派の狀態になつて居るけれども、本當の敎義としては、聖本法華でないやうなそんな法華經の解釋の仕方では、日蓮門下の法華經講義にはならぬ。だから諸佛と言へばこれは本佛に統一せられる、本佛の「毎に自ら是の念を作す」といふ毎自の悲願を忘れぬやうにする事が一つである。それから第二には、諸々の德本を植えるといふこと、德本といふのは德の本ではない、德は本なり財は末なりといふ事であつて、一切の道德といふ事である。本佛に護られて居るといふその感激の信仰と、諸々の道德を實行して行く所の修養、それから第三には、「正定聚に入り」で、孤立して居つては大きな善い事は出來ないから、そこで正しき信仰及び思想の定まつた者の團結を作つて、その中に入つて協力してやつて行かなければならぬ、異体同心の精神になる事を言ふのであります。第四には一切衆生を救ふの心を發すで、特に慈悲の心を喪はぬやうにしなければならぬ。これは諸々の德本の中の主なるものであるけれども、慈悲心が殊に大事であるから、總じては諸々の德本、別しては慈悲といふ事に分けて申すのであつて、總別互に兼ねて居る。この大事な事四つを擧げて、法華經とは、本佛の守護と、道德の觀念と、正義の團結と、慈悲の發作と、この四つを心懸けたならば、活きた法華經が自らその中に存するのである。これ程大事に、一番に佛に護られるといふ事を擧げてあるのに、佛を忘れてたゞ言葉だけで、形式だけにやつて行かうとか、或は信心すれば何も外の事は要らぬといつて道德を蹴つたり、下らぬ議論を吐いて分裂を昏ならしめる、慈悲心などは何處かへ飛んでしまつたといふやうな日蓮門下の行き方では、根本精神に於て法華經を毀つけて居るものである。そんな事は問題にならぬ、モウ少し能く考へなければならぬ。それは何故にあゝいふものがあるかといふと、長い間に下らぬ者が先生をやつて居ると、一つ間違へ、二つ間違へ、終には間違ひばかり殘つてしまふ、だから法華經の根本に歸つて研究しなければならぬ。法華經の研究でも、吾輩等は盛んに之を開いて居るが、外では殆どやつて居りはせぬ、さうして餘りに法華經を高い所に上げ過ぎてしまつて居るから、大抵の寺の和尙に「法華經はどんなものです」と言つて聽いて御覽なさい、迚もそれは話も出來ない、又この四法成就といふことでも、說明も何もヨウ出來やしない。そんな工合で、何にも知つて居りはせぬ、たゞ詰らない日限のお祖師樣は淺草にありますといふやうな事だけしか知つて居らぬ、それは全く俗化してしまつたものである。

一七八、爾の時に普賢菩薩、佛に白し

て言さく、世尊よ、後の五百歳濁悪世の中に於て、其れ是の經典を受持すること有らん者は、我れ當に守護して其の衰患を除き安穩なることを得せしめ、伺ひ求むるに其の便を得る者無からしむべし。

この所は普賢菩薩が佛に申上げて、後の五百歳に法華經の行者を護つて安穩を得せしめ、又その缺點を伺ひ求める者があつても、それをして便りを得せしめないやうにするといふ事を述べた、普賢菩薩の法華行者守護の誓願であります、さうして陀羅尼品と同じやうに、茲にやはり神呪を說いて居る。後の五百歳といふのは、大集經に依れば、佛の滅後を五つの五百歳に分けて說いて居る、その第五の五百歳、それを後の五百歳と謂ふのであります。これは法華經流布の時として、佛滅後二千年より以後法華經弘布の時と日蓮聖人も言はれた、「後五百歳弘宣流布」といふ文の證據であります。

一七九、普賢よ、若し是の法華經を受持し讀誦し正憶念し修習し書寫すること有らん者は當に知るべし、是の人は則ち釋迦牟尼佛を見るなり、佛口より此の經典を聞くが如し、當に知るべし、是の人は釋迦牟尼佛を供養するなり、當に知るべし、是の人は佛善哉と讚む、當に知るべし、是の人は釋迦牟尼佛の手をもて其の頭を摩でられん、當に知るべし、是の人は釋迦牟尼佛の衣に覆はるゝことをえん。

この一節は、法華經を修行し正憶念するといふ事も大事であるが、それはたゞ經文ではない、即ち

釋迦牟尼佛を信じ、釋迦牟尼佛を思ふ精神の結びつきに於て法華經が活きて來るのである。だから法華經に値へば佛にお目にかゝつたと同じ事である、さうしてこの經文を活ける釋迦牟尼佛のお口から聞いて居るやうに心得て行かなければならぬ。その代りに法華經を大切にして居るといふ事は、即ち釋迦牟尼佛を御供養して居るものである。故に讚められるのは佛から來る、文字が讚めて呉れるのではない、活ける佛が善哉々々と讚めて下さる、又活ける釋迦牟尼佛が手を以て摩でゝ下さり、衣を以て覆ふて下さるのである。故に法華經に接近する者は活ける釋迦牟尼佛を忘れてはならないといふことを極力說いたものであります。

日蓮聖人は之を『守護國家論』の中に引證せられて、詳しくその意味を敷衍せられて居る。即ち法華經を信じない者の心では、佛滅後であるけれども、法華經を信ずる者の爲めには、何時でも佛在世である、活ける釋迦牟尼佛に接近して居る者が法華經信者である、法華經とは一言にして言へば、釋迦は死んで居らぬ、生きて居る、生きて居るといふことを、時々刻々に憶念せしむる事を說いたものが法華經であるとまで言つて居る。だから釋迦牟尼佛を忘れるやうな者は決して無い譯である、之を基督敎に就て考へたならば、天に在します眞の神よといふ事を忘れては、基督敎は存在しない。宗敎は皆さうである、實在の觀念から離れて宗敎は無いといふ事は、宗敎學上の定論と言つて宜い、人格の實在を失ふた時、宗敎は無いものである。自己に就いては靈魂の滅亡を唱ふる所に宗敎は無い、客觀に就いては人格の實在を認めない所に宗敎は無いのである。「靈魂は滅亡する、併し法華經は信じて居る」……そんな事は、それは俗信迷信にはあるであらうけれども、本當の宗敎の格には入らぬものである。それと同じで、客觀に人格の實在が立證されなくては、その宗敎は役

立たぬものである、西洋で基督教が客觀實在の神を說き得なくなつたのは、それは哲學の爲めに破られたからである、そこで內在の神といふやうな事を言つて居る。佛教でもやはりさういふやうな思想は中々あるけれども、それ等の思想を誡めたものが、この「釋迦牟尼佛の手をもてその頭を摩でられん」といふ事であつて、內在の神では頭を摩でるといふ事も、衣を以て覆ふといふ事も出來ない。そんな愚論はいかぬといふことを敎へたものである。その通り日蓮聖人には現れて法難迫害の時には必ずこの經文に感激せられて覺悟を進べられて居る、吾々の信仰も亦その通りでなければならぬ。

一八〇、普賢よ、若し如來の滅後後の五百歲に、若し人有つて法華經を受持し讀誦せん者を見ては、是の念を作すべし、此の人は久しからずして當に道場に詣して諸の魔衆を破し、阿耨多羅三藐三菩提を得、法輪を轉じ法の鼓を擊ち法の螺を吹き法の雨を雨らすべし、當に天人大衆の中の師子法座の上に坐すべし、普賢よ、若し後の世に於て是の經典を受持し讀誦せん者は、是の人復衣服臥具飲食資生に貪著せじ、所願虛しからじ、亦現世に於て其の福報を得ん。

この所は、法華經の行者は必ず成佛するといふ事を八相の儀式に寄せて說かれたので、菩提道場に座し、魔を降し、さうして菩提を得、法輪を轉じといふ、即ち降魔、成道、轉法輪の三つの事を擧げて、必ず成佛をする。さうして天人の爲めに師子の法座に上つて大法を說く——師子の法座といふのも、か

ざり言葉とすればたゞ師子の法座であるけれども、師子座といふのは大乘佛教、殊に立派な教を說くが故に、その言葉に意味があるのである。今日の佛教徒は、何々の寺以上は師子の法座だ、僧正以上は師子の法座だナンと言つて、坊さんの位などを言つて居るが、そんなものが師子の法座ではない、本當の偉大なる佛教を說くべく、師子の法座に上る人を言ふのである。さうしてこの法華經の爲に盡す者は、決して物質慾に心を執はれるやうな事はない、けれども自ら世間的幸福もその中に集つて來る譯である、現世に於てその福報を得るといふ事が說かれて居る。これは要するに法華經の行者を獎勵した言葉である、法華經の行者は菩提を成就して、師子の座に上り、現在に於ても物質慾を貪らぬでも相當なる幸福を伴ふといふことを進べて、法華を行ずる者を慰安せられたのであります。

一八一、佛是の經を說きたまふ時、普賢等の諸の菩薩、舍利弗等の聲聞、及び諸の天龍人非人等の一切の大會、皆大いに歡喜し、佛語を受持して禮を作して去りにき。

この一節は法華經の最後の經文であつて、この法華經を聽きし菩薩、聲聞、その他一切の大會悉く孰れも大に歡喜して、佛の說かれた法華經の言葉をば忘れないやうに記憶して、さうして御禮を申上げてその席を去つたのであります。この孰れも皆大に歡喜したといふ事は、皆よく領解してそこに歡喜法悅の心を懷いたといふことで、歡喜とは信仰、領解、法悅、總てを含んだ言葉である。一切のお經は、みな歡喜受持といふ事で結んであるのであつて、佛教は決してさうわからない事を說いたものではない、法華經は難かしい〳〵と能く言ふけれども、それは難かしい所もあるが、大体の組織構造といふものは

さう難かしい事ではない。却つて妙な理窟を捏ねるからわからなくなるのである、文字に表はれて居る所に法華經の精神は在るのである。この經文以外に別なわからぬ事が隠れて居るナンといふ事を言つて、まるで經文の意味に反したやうな事を日蓮門下が段々やつて居る、『御義口傳』一流の解釋見たやうな事をやつて居るが、あんなものは大變な間違ひである。『御義口傳』などは誰が書いたか知らぬけれども、日蓮聖人の御遺文全体から見て、あゝいふ突拍子もない事は宜くない事である、叡山あたりにあんなやうな學風もあつたけれども、經文から飛離れてしまつて職け出すといふやうな事はいけない事である「手に經卷を握らざれば用ひず」と日蓮聖人の言つたのは、あゝいふ突拍子もない事を言つてはいかぬといふ事である。だから昔は『御義口傳』などはさう尊重したものではない、必ず御遺文に依つて、御遺文の中の錄内、錄内の中に於いても五大部を中心にして思想の中堅を置いて、それから次第に活用して行つたものである。日蓮聖人の書いた物なら何でも構はぬ、同じ事ぢやないかといふ風にやつて行つたならば間違ひが起るから、恰度一切敎にして見ても、法華經に基いて、法華經も壽量品を思想の中堅にしてそこに標準を立てなければならぬやうなもので、御遺文だからといつても『御義口傳』のやうな錄外も錄外も、大体日蓮聖人の書いた物ではない、弟子の聞き書といふやうなもので、それも餘り當てにならぬ、そんな物を中心にして行くことは出來ない。だからズッと古い昔には、決して『御義口傳』などは重く用ひなかつたものである、あの書き方は殆ど勝手な言ひ草になつてしまつて居る。さういふやうな、經文に接觸を取らないやうな學說が流行つて來たといふことは、これが又非常に人を迷はしたものである。大抵變な事を言ふ奴はあれに類する、御義口傳流と稱して宜しい。それで行くならば勝手に經文と離れて居つても說が立てられるやうなものであるけれども、それは日蓮聖人が手に經卷をとらざれば用ひずと言つた事と、まるで意味が違つて來る。又經卷をとつて居るからと言つても、突拍子もない全然關係の無い事があるのだから、それはどうしても間違ひである。あゝいふ事は皆矯正しなければいかぬ。併し今日は遺憾ながらさういふ事を語るやうな學者が居らない、皆平凡以下の者で、勝手な事ばかりやつて居る。日蓮主義は今日外には發展しつゝあるけれども、内部に於て正義を主張する者は、寥々として曉天の星よりも稀なるものである。今後と雖も放任して置けば何を言ふかわからぬ、天皇本尊論などを言ひ出したり、釋迦は天照太神の化神ぢやと言つたり、色々な事を言ひ出して來て、危ない事夥しい。物が間違ふと言つても、小さい事なら宜いけれども、根本がひよつと違ふと、飛んでもない事になるものである。近年に於て正義の方の主張に復活し居るかどうかといふと、内部の狀態は益々混沌たる有樣である、それは何故かと言ふと、善い學者が居らぬからである。本人は惡い積りで言ふのでもなからう、間違つた事を言うて耻を掻かうと思つてやり居る譯でもなからうけれども、孰れも自分の間違ひがわからない、わからない同志が詰らぬ事を言うて居るのだから、議論でも學問でもありはしない。さう〳〵皆が皆馬鹿な事を言つて、死んだ後まで耻を曝さうといふ決心した譯でもなからうけれども、事實はさうなつて居る、本當にその點は餘程警戒を要する事であります。

歴史的に言へば、所本法華宗以外の各敎團は、古來その間違ひを續けて來て居る、餘り善い時代はありませぬ。どういふ譯か本當の研究をしない、初めから出發點が間違つて居る。一致派といふやうな事も、本造一致と言つて壽量品の卓越を抑へんとする考であるし、八品派といふことも、壽量品を抑へて

神力品正意といふ、興門派も本佛釋尊を抑へて、本因下種といつて、本因妙の行者日蓮、それが本尊であるといふやうな事を言つて居る、みな出發點が間違つて居る。壽量品を中心にした法華經でなければならぬ、『開目鈔』に「この壽量品無くば天に日月無く人に魂ひ無きが如し」と言うてある、その壽量品を抑へようとかゝつたのであるから、これは土臺調子外れの親玉ぢや。根本が違つて居るから、何處をどう捏ね廻してもうまく行く譯がない。恰度天皇の御威德を抑へようとして國体論を書いて居るやうなものだから、あつちへ捏ね、こつちへ捏ねした所で、結局うまく行く譯がない。一致派、興門派、八品派、その他色々あるけれども、孰れもその主張は不透明で、何と言ひ居るかちつともわからぬ。不受不施派といふやうなものでも、たゞ大佛供養に關係して、法華宗以外の御布施は受けないと言つたので、根本の教義は全然無視して居る、祿なものではない。もつと氣の利いたことを議論すれば宜いぢやないか。けれどもマアそれを統合して、互に譲り合つて一つ外部に向つて大に日蓮主義の宣傳をやつたが宜からうと思つて、自分等は長年の間餘り宗派の間違は指摘せずに來たけれども、言はずに置けば何時までも宜い氣になつて居るから、法華經要文の講義の終りに一言附け加へて、自分は死んでもこれだけの意見は後代に遺るやうにして置く次第であります。

觀普賢經

觀普賢經は法華經の結經でありますが、それは前の「勸發品」に續いて、やはり普賢菩薩の說があり、それからこの經文には、釋尊の分身の事から結んで釋尊の統一が示されてある。それから釋尊の人格實在といふ事に就て、餘程明かに示されて居る、その事は以下に摘出する經文の中に於いてわかるやうになつて居ります。それから懺悔の事があつて、これも餘程能く說かれて居る。それから尙は日蓮聖人の本尊を見るに就いて、戒壇の本尊としての事が說いてある、さうして戒壇主義の本尊に依るか、三寶式の本尊に依るかといふと、それは壽量品の三寶式の本尊に依らなければならぬ、それがこの結經の中に自から又三寶中心の思想がありますから、そこは横切らないものである。その何れを採るかと言へば、三寶中心の思想で本尊は解釋しなければならぬ、戒壇本尊といふのは、三師一證一伴といふ式であるが三師一證一伴の式を以て本尊を解釋するのは第二の問題であつて、三寶式が第一義である。十界互具などといふ事は、第三にも第四にも附くべきものである。それで曼荼羅全體が一體本佛だナンといふ事は間違ひである、南無妙法蓮華經だけを中心にして、人格の實在を忘れて、この中に何もかもあるといふやうな事は、眞言の思想に墮落したものであつて、萬有神的の思想である。これは決して日蓮聖人の正義でもなく、壽量品の正義でもない。それでこの結經には、三寶中心の思想と、三師一證一伴の思想とがありますが、その點が餘程參考になると思ふ。これ等の問題に就て以下要點々々を摘出してお話しようと思ひます。

一八二、世尊よ、如來の滅後に云何してか衆生菩薩の心を起し、大乘方等經典を修行し、正念に一實の境界を思惟せん、云何してか復當に煩惱を斷ぜず、五欲を離れずして、諸根を淨め諸罪を滅除することを得べき。

この所は煩惱をも斷ぜずして罪障消滅するといふ事が書いてある、これが非常に大事な問題で、法華經を修行するに方つて、むやみに難行を强いる譯で

はない。だから煩惱をも斷せず、五欲をも離れずして、信仰に依り懺悔の法に依つて罪障消滅が出來るといふことを說かれたのであります。これも日蓮聖人の信行中心の思想から大事な事であつて、御遺文の中にはこの事が引かれてある。四條金吾が一たびは領分を召上げられたけれども、それが倍になつて戻つて來た時に、如何にも目出度いことである、それは慾得から考へても倍になつたといふ事は目出度い、法華經は煩惱を斷せずして成佛の出來る道であるから、算盤づくで考へてもうまいぢやないかといふ事を書いて送られて居る。けれどもその領分を捨てゝ出で行く時分には、たとひ乞食になつても正義を毀つけるなと言はれて居る、あの關係を能く知らなければいかぬ。今の日蓮門下などは、捨てゝ行かなければならぬ時分にも算盤勘定ばかりして居るやうな手合が多くなつて「法華經への御布施と思召して同じくは歎きたる色も無くて」と言はれて、家屋敷知行から一切を捨てゝ潔く去れといふ、あの氣骨の處は全然無くなつてしまつて居る、たゞ戻つて來た時の煩惱を斷せずしてといふ、そこばかり言ふやうな事になつて居る。これ等も學問がどうといふよりは、人格が墮落して居るから、そんな所だけしか目に入らなくなつたのではあるまいかと思ふ。

一八三、大乘に因るが故に大士を見ることを得、大士の力に因るが故に諸佛を見たてまつることを得たり、諸佛を見たてまつると雖も猶未だ了々ならず、目を閉れば則ち見、目を開けば即ち失ふ、是の語を作し已つて五體を地に投じて。

この句は佛の實在を憧れて居るのであつて、今目を閉づればあり〳〵と佛のお姿が見えるけれども、目を開ければ見えない、信仰の眼だけでは佛の實在といふ事があり〳〵とそこに現はれて來るけれども目を開けて拜しようとすれば、そこに實在の佛を見る事が出來ない、洵に情けない事である、更に進んで眼を開けても見えるやうになりたいものだと言つて非常に強く佛に對する憧れの精神を表はして居る。これは眼で佛を見ようとする事になつて居りますが壽量品の方は、一心に佛を見たてまつらんとは欲するけれども、それは眼を以て見ようとはして居らぬ、やはり信仰に依つて見ようとして居るので、そこがこの結經とは違つて居る。結經の意味はその點に於ては壽量品は採らないので、この方が低いのである。壽量品のは信仰の眼であつて、日蓮聖人の所謂「暮れ行く空の雲の色、有明方の月の光も心を催す思ひなり」――これで宜しいのである。その雲の中にお釋迦樣の顏が見えるやうになりたいといふやうな事は要らぬ事である。併し今この結經は、さういふ風に眼を開けても見えるやうになりたいといふほどに熱烈に佛を慕うたものであります。

一八四、復勤めて大乘經典を誦習せん、大乘方等經を誦習するを以ての故に、即ち夢中に於て釋迦牟尼佛諸の大衆と、耆闍崛山に在つて法華經を說き、一實の義を演べたまふを見ん、敎へ已りなば懺悔し渴仰して見たてまつらんと欲し、合掌胡跪して耆闍崛山に向つて而も是の言を作せ。

如來世雄は常に世間に在す、我を愍念したまふが故に、我が爲に身を現じたまへ。

これは大乘經典、殊に法華經を誦習して居れば釋迦牟尼佛が大衆を率ゐて耆闍崛山に於て法華經を

說きたまひ、一實の義を演べたまふを見る事が出來る。さうしてそれに對して懺悔し、耆闍崛山に向つてこの言葉を作せといふ、これが非常に宜しいと思ふ。「如來世雄は常に世間に在す」――あなたの實在は一點も疑はない、今や涅槃せられたと言つた所がそれは表面の事であつて、實は常に世間に住んでお居でになる、さうして我を惑んでお居でになる、一目お目にかゝりたいものでございますといふ事を申せといふのであります。これは今申す通り、一目お目にかゝりたいといふ事を言はなくとも宜いといふのが、日蓮の主張である、たゞ「如來世雄は常に世間に在す、我を憐愍したまふ事疑ひなし、感激に堪へず」といふことを信念するが宜しいといふのが、日蓮の叫びであります。このお經では、我が爲めに身を現じたまへと言つて、さうして信仰を進めて行く事になつて居る。

一八五、時に空中の聲即ち是の語を說かん、釋迦牟尼佛をば毘盧遮那遍一切處と名けたてまつる、其の佛の住處を常寂光と名く。

この句もやはり釋尊の實在を明かにしたもので、それは空中の聲として、釋迦牟尼佛は毘盧遮那遍一切處と名けるといふ事を言つた。毘盧遮那は梵語であつて、譯して遍一切處といふ、これは即ち梵語と譯語と兩方擧つて居る譯である、それは即ち法身の如來であつて、宇宙遍滿のものであるから、空間に於て言へば遍滿であり、時間に於て言へば無始無終である、時間を貫き空間に滿ちて居る、所謂普遍妥當性と哲學上の意味に於て言ふ、釋迦はその普遍妥當性の實在である。だからその佛のお居でになる所は常寂光土である、その佛は實在の毘盧遮那であるといふ事を空中の眞理の聲として、大衆を驚かした。釋迦はたゞ迦毘羅衞城の太子と生れて、跋提河に涅槃を告げるものではない、これは毘盧遮那である、大日如來が毘盧遮那ではない、釋迦牟尼佛、それが空間時間に遍滿した普遍妥當性の實在の本佛であるといふ事を言つたのであります。斯ういふ意味は壽量品の眞意と全然一致することになるので、中々大事な經文であるから、斯ういふ所は能く研究して置かなければならぬ。

一八六、一切の業障海は皆妄想より生ず、若し懺悔せんと欲せば端坐して實相を思へ、衆罪は霜露の如し、慧日能く消除す、是の故に至心に六情根を懺悔すべし。

この一節は懺悔の言葉でありますが、一切の業障海ほどある澤山の罪があつても、それは皆妄想の迷ひから生じたものであるから、それを懺悔しようと思へば、端坐して實想を思へ、實想とは自分に佛性があり、上に本佛があるといふことである。普通は實想といふと何か一念三千の神秘な事だと思つて居るけれども、人間に就ての實想は佛性の存在であるし、宇宙の實想は本佛の實在であるから、そこで佛性の開發と、本佛の感應を信じて行く事、これが實想を思ふといふ事である。實想と言つたならば、何か面倒な哲學的の妙理より外無いやうに考へて居る人もあるけれども、それはそれ位しか學問が出來て居らぬ人の言ふ事である。眞の實想は、宇宙觀的に言へば十界互具一念三千、人身觀的に言へば佛性である。それを宇宙の人格實在論に於て言へば本佛である。であるから實想を思ふといふことは、その主なる點は、自分は罪を犯したと言つても、それは表面の妄想が犯したのであつて、自分の奥底の佛性は罪を犯したものではない、その上に、宇宙には本佛があつて我を救ひ給ふこと故に、本佛の慈悲と、吾等の佛性の覺醒とに依つて、この罪が消えぬといふ

ことはない、といふ事を深く信じて居れば、諸々の罪は霜露の如く消え去つてしまふ。故に六情根を懺悔すべしで、眼、耳、鼻、舌、身、意の六根に於て犯したところの罪を懺悔しなければならぬといふのであります。

一八七、唯願くは釋迦牟尼佛、正偏知世尊、我が和上と爲りたまへ、文殊師利具大悲者、願くは智慧を以て我に清淨の諸の菩薩の法を授けたまへ、彌勒菩薩勝大慈日、我を憐愍するが故に亦我が菩薩の法を受ることを聽したまふべし、十方の諸佛現じて我が證となりたまへ、諸大菩薩各其の名を稱して、是の勝大士衆生を覺護し我等を助護したまへ、今日方等經典を受授したてまつる、乃至命を失ふまでにせん、設ひ地獄に墮ちて無量の苦を受くとも、終に諸佛の正法を毀謗せじ、是の因緣功德力を以ての故に、今釋迦牟尼佛我か和上となりたまへ、文殊師利我が阿闍梨となりたまへ、當來の彌勒願くば我に法を授けたまへ、十方の諸佛願くは我を證知したまへ、大德の諸の菩薩願くは我が伴となりたまへ、我れ今大乘經典甚深の妙義に依つて、佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依すと、是の如く三たび說け。

これは最初に申した受戒の作法で、三師一證一伴の式であります。三師とは和上、阿闍梨、敎授であつて、その和上としては釋尊、それから阿闍梨といふのが文殊、敎授といふのは彌勒、これが三師である、十方の諸佛が證明となる一證であり、それから菩薩以下が同伴衆と言つて、一緒にやる所の者である。それ等の人々の名前を一々呼んで、各々その名を稱して、さうしてどうかお護り下さいと言つて居るけれども、併し釋尊がこの中の中心である、和上といふのが戒を授ける所の中心の方である、阿闍梨といふのは、その戒を受ける者の補佐役見たやうなものである、その者がやり損はぬやうに氣を附けてやるやうなもので、芝居で言ふたならば、黑い物を被つて役者の背後に添うて居るやうな意味のものである、受戒の途中でやり損ひをしたり、まご〳〵したりせぬやうに、會行事と言つて護つて行く所の者である。それから敎授はそれまでにいろ〳〵の事を敎へて、戒を受くる心得作法などを敎へて置く者である、中心は和上にある。それから大勢の諸佛は證明、證人である、菩薩は同伴衆である。

これは迹門であるからして迹化の本尊になつて居る。日蓮聖人の本化の本尊に至ると、文殊の代りに阿闍梨は多寶如來となり、敎授は彌勒の代りに上行菩薩になつて居る、上行の再身日蓮として、吾等にその心得を敎へられたのである。これが曼荼羅の上に表はれて居るのであるから、曼荼羅の中心はやはり釋尊を和上として行かなければならぬ、多寶如來は阿闍梨である、上行——再身日蓮が敎授であり、十方の諸佛と言つた所がそれは證明者である、文殊以下は同伴衆である。日蓮聖人の『本尊鈔』あたりでもやはりさうなつて居る。

迹化地方の大小の諸菩薩は、萬民の大地に處して雲閣月卿を見るが如し、十方の諸佛大地の上に處するは、迹佛迹土を表する故なり。

とあつて、中心は三寶式である。迹化の菩薩や十方の諸佛は、大地の上に處して、恰も天皇の行幸を人民が土下座して拜して居るやうな譬である。それを

紙に書くから文珠が二の段になつて居るとか、或は善德佛十方の諸佛が上行菩薩と無邊行菩薩の間に入つて居るとかいつて、何かそれが大變意味のあるやうな事を言ふけれども、それは皆佛論である、三寶式であるから、釋尊と妙法と日蓮と、これが中心である。『本尊鈔』でもさうなつて居る。能く研究しない者があんな事を言ふのであつて『本尊鈔』でも今言ふ通り、大地に處して雲閣月卿を見るが如しといふので、決して二の段だの一の段だのといふやうな譯ではない。大地の上に頭を下げて居る者である。三寶光顯の本尊である。今この結經もやはりその意味になつて居るのである。

さうしてその前に誓ひを立てゝ、設ひ地獄に墮ちて苦みを受けても正法は毀謗しない、その法に對する忠實の精神に依つて、どうぞ釋迦牟尼佛我が和上となつて戒を授けて戴きたいといふことになるのである。今の誤つた日蓮の門下のやうなものであつたならば、釋迦は決してこれに戒を許しはしない。賽錢箱の爲には正法を枉げるとか、情實の爲に、法緣の爲に、「どうもいろ〳〵事情もあるものでございますから……」といふやうな事はいけない。この地獄に墮ちても正法を毀謗せぬといふことは、宗教家としては一番嫌な事を擧げたのであつて、地獄に墮ちるといへばこんな辛い事は無い、その地獄に墮ちるやうな苦みを受けても、正法は誘らない、況してや肉體を苦められる事ぐらゐは何でもない。この正法護持の因緣を以て、どうぞ和上となつて戒を授けて下さい、文珠師利は阿闍梨となり、當來の彌勒は教授となつて法を授け給へ、十方の諸佛は證明となり大德の菩薩は同伴衆となり給へといふ、この三師一證一伴の式であるが、それが更に三寶式となつて居る。我今大乘經典甚深の妙義に依つて、佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依するといふので、同じ三寶でも大乘の三寶に歸依するのである。さうして之れは迹門に依れば迹門の三寶となり、本門に依れば本門の三寶となる、日蓮聖人は法華經の本門の甚深の教義に依つて三寶に歸依したから、之れを本門の本尊と言つたのである。擴げれば三師一證一伴であるけれども、中心が三寶であるといふ事がこれに依つて能くわかります。『本尊鈔』も前に言ふ通り、壽量品にもやはりその通りであつて、良醫と良藥と良醫の使といふことになつて居る。この三寶光顯といふことは、たゞ日蓮聖人の書いたものだけではなくて、日々唱へることが「開迹顯本法華經中常住の一切の三寶護法列位の諸天善神來師影嚮」といふこれが日蓮聖人の本尊であります。議論の餘地も何もありはしない、無學だからそれがわからぬのである。それはどんな風に書いてあるからと言つたつて、書くには少々具略があつても、唱へ言葉にちやんと法華經中常住の一切の三寶となつて居るのである。これは又佛教の大原則から來て居る。そこは日蓮聖人の教は決して變つた事を言つたものではない、やはり釋尊の教の根據に基いたものであります。

一八八、懺悔法とは、但當に正心にして三寶を謗ぜず、父母に孝養し、師長を恭敬し、正法もて國を治め人民を邪枉せざれ、六齋日に於て諸の境内に敕して力の及ぶ所の處に不殺を行ぜしめ、但當に深く因果を信じ一實の道を信じて佛は滅したまはずと知るべし、佛阿難に告げたまはく、未來世に於て若し此の如き懺悔の法を修習する時あらん、當に知るべし、此の人は懺悔の服を著、諸佛に護助せられて、久しからずして當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずべし。

この所は五種の懺悔を說いてあります中の要點を拔いたのでありますが、その懺悔の法は第一は三寶を誘らぬといふこと、それから第二に父母に孝養し師長を恭敬すること――この師長といふ中に、國土などは皆入るので、長といふ中の最大なる者が國王であります。それから第三に正法を以て國を治めて人民を苦めない、即ち立正安國といふこと、第四には六齋日には自分の權力の及ぶ範圍に於て殺生を誡しめること、それから第五には深く因果應報の理を信じなければならぬ。因果を信ずるには生命の存續と自分の爲したる行爲の結果といふものを考へて、斷見常見の二の外道を打破する事が、深く因果を信ずるといふ事である。さうして一實の道を信ずるといふのは、即ち世法佛法を貫串して、今日の言葉を以て言へば宗教、道德、政治、經濟生活、それが皆一つの大信仰を中心にして、秩序整然として行かなければならぬ。法華經に所謂「若は俗間の經書、治世の語言、資生の業等を說かんも皆正法に順せん」といふ、あの一實の道である。『神力品』には「畢竟して一乘に住せしめん」といひ、『安國論』に「早く信仰の寸心を改めて實乘の一善に歸せよ」と謂ふ、實乘の一善といふのがこの一實の道である。『本尊鈔』の「天晴れぬれば地明かなり」といふのも同じ事である。その通りに信仰と世間の調節を圖つてやつて行く、その主義でなくてはならぬ。さうして「佛は滅したまはずと知るべし」で、佛の實在といふ事を忘れてはいかぬ、この最後の所が非常に大事である。「但當に深く因果を信じ、一實の道を信じて佛は滅したまはずと知るべし」これが法華經の信仰である。

之れを終りの言葉として、あとは注意をしたのである。佛は阿難に告げて言はれるには、未來世に於てこのやうな懺悔の法をやらうと思ふならば、その者は先づ慚愧の心を起して、懺悔の服を着なければならぬ。人間が服を着なければ體をなさぬやうに、

慚愧羞耻の心がなければならぬ、慚愧なき者は德を積むことは出來ない、此に敎へた事がその通りにやつて行けなければ、その時はそれを慚ぢて、深く因果を信じとあるのに、自分は因果を忘れて居る、佛は滅したまはずと知れとあるのに、佛の實在といふことを忘れて居つたといふやうに、その場合その場合の慚愧心に依つて懺悔の服を着る。さうして諸佛に護られて行つたならば、久しからずして菩薩を成就する事が出來る。

これが觀普賢經の結末の句になつて居るのでありますが、洵に能く整うて居ります。さうしてこれがやはり法華經の壽量品の精神に相應して居るので、これが敎義の正系である。開經(無量義經)の十功德品に、

是の經は本と諸佛の室宅の中より來り、去つて一切衆生の發菩提心に至り、諸々の菩薩所行の處に住す。

とあつた所から、今この結經の最後の文に至るまで前後の關係が一貫して居るのである。それから見て今日の日蓮門下の誤つて居る事は洵に明瞭な譯であります。日蓮主義は高等なる宗敎である。勿論下層なる者をも導くけれども、それは敎化の圓熟から導くのであつて、敎の中心を引下げるのではない、本尊を引下げたり、敎理を引下げたりするのではない。敎化の上に接觸を取つて、その說明がよく消化れるか、成べく實社會と接近して敎化をするといふことは宜いけれども、近頃のやうに、敎を引下げて詰らぬものにするといふ事は無い。早晩日本の宗敎は、どうしてもその點に於て大改革をやらなければならぬ、宗敎の必要を徹底せしむると同時に、宗敎の選擇をもつと徹底的にやらなければならぬ。これが遲れゝば遲れる程、人心の墮落と思想の惡は免れない譯である。百の政治上の政策をやるよりも、宗敎道德の復活運動が今日は一番大切である、斯うなつ

てしまつた現代の狀態は、これは政治の改革運動ぐらゐでは治らぬと思ふ。モツと社會教化を政治の中に入れなければならぬ。今の所謂政治上の方法では迚もいかぬ。モツと精神教化を盛んにして、さうしてそれを政治の本體と心得て行かなければならぬと思ふ。司法省や、文部省や、海軍省や、それよりも上にモウ一つ教化省といふものでも置いてやる位でなければ、今日以後の人間は濟度されないであらう。それは釋尊もさう考へ、聖德太子もさう考へ、日蓮聖人もさう考へた大方針である。餘りに今日は教化を輕い事に思ふて居るから、そこで人心も墮落し、社會も腐敗し思想も險惡になつて行くのである。教化事業は今日の施設よりは百段も二百段も重要視すべきものではないかと思ふのであります。

之を以て法華經要文の講義の完結と致します。

（完）

連載しました法華經要文講義は完了しました。次號からは謹めて日蓮上人の教義信條の要束を連載する爲に本月號には少し多量に掲載しました。

大僧正本多日生師著

一切の勝利は人格にあり

——名古屋放送局より放送の講演——

一部　金五錢　送料金二錢
十部　金三十五錢（送料共）
百部　金三圓（送料共）

發行所　名古屋市東區田代町城山　統一編輯局　振替名古屋一〇八一九

記事

各地教信

京都布教　一日午前八時より本山に於て關東大震災記念大法要を嚴修し、慎重裡に九時終了、直に講演「大震災の當時を偲びて」土持真達師。午后七時より青年會及び健兒會主催にて貳萬餘の宣傳ビラを用意し、自動車隊を組織して、京都全市に渡り震災當時を忘れぬ爲めの大宣傳を行ふ、自動車隊には土持、豊田、新葉、亀井、從野の各氏乘り込み、尙ほ徒步隊には山田篤三郎氏、健兒會々員を引率し、市内博覽會場前にて大宣傳をなし、十時を期して一同引き上げ、本堂前にて御題目と萬歲を三唱して散會す。△二日夜七時半より妙滿寺講堂に於て護正會例會開催。「佛教の大綱」原田日勇師△八日成就院にて護正婦人會例會。「震災三週年紀念運動」有田宏道師△仝日夜川東本正寺に於て二樂會例會。「信仰の力」金光孝碩師「宗教の人格論」原田日勇師△九日正行院に於て正行婦人會例會。「法味」原田日勇師△十二日夜妙滿寺講堂に於て青年會例會。「龍の口」原田日勇師。「國家と宗教」細野長雄閣下。來會者一同御題のお題目に舌鼓を打ちつゝ茶話會を開く。△十三日午後二時より妙滿寺に於て宗祖會嚴修後講演。「朝鮮事情に就て」横山惠正師△十五日午後二時より法光院に於て法光婦人會例會。「最高人格の基準」豊田通泰師。△十八日午後七時半より京都立ち結社及び時勢研究聯合京都立正社主催のもとに妙滿寺講堂に於て大講演會開催例に依り健兒會男女會員七十名餘の國歌宗歌に始まり、「開會之辭」布教師金光孝碩師。「余の時弊觀」陸軍少將杉村勇次郎閣下。「東洋文明の大調和點」大僧正本多日生猊下。「開會之辭」本山部長原田日勇師。七、八の兩月は京都市民は猊下の大獅子吼に接せず、久し振りの人格に何れも其の法味に憧れ、集まるもの數百名、滿堂立錐の餘地なし。△十九日午後七時半より本山大方丈に於て青年宗教部發會式擧行後講演眞面目なる會合なりき。「法顯三藏に就て」中村英俊君。「一代教に就て」原田日勇師。

健兒會報告　從來迄ほ健兒會も只單なる子供會として童話、歴史談、講話等のみによりて例會開催しつゝありしも時勢に鑑み新に高等部なるものを設けて九月より實行する事となつた、

六日（日曜）午前九時より大方丈に於て（高等部）「完全なる人格者」土持真達師。△十三日（日曜）仝上。「聽と力」豊田通泰師。△二十日（日曜）仝上。「兄弟の友に」土持真達師。△廿七日（日曜）仝上御寶前に於て。「信仰の力」土持真達師。尙仝上四回に於ける普通部には有田宏道師、土持真達師、豊田通泰師、中村英俊師、新葉卯三次郎、山田篤三郎、亀井弘三郎、有田健一、金光喜久夫、高木貞太郎の各氏何れも熱心に教訓しつゝある事として感謝頻る其好なり。

大阪教報　△九月五日蓮成寺にて立正結社談話會。△十日錢仰會。「日蓮聖人の宗旨」和

井田氏△十一日堂岡寺にて學生日蓮講演會。「佛教史の大要」石井氏「日蓮主義の特長」伊氏△十二日。「信念感佛に就て」和井田氏。「現代社會の種々相」京藤師。△十九日大紙倶樂部にて。「東洋思想の大共通點」本多猊下。△二十日「婦人會」「慈悲に對する感激」本多猊下△二十三日談話會。人生と奮闘」京藤師「强盛の信」上田師。△二十三日彼岸會法要後。「彼岸に就て」和井田氏。「身讀法華」京藤師。△二十五日講演會。「日蓮聖人の宗旨」和井田氏。△二十六日平山宅にて。「信心の德」京藤師。△同日學生日蓮講演會。「佛教と日本文化」中川文學士。何れも盛會、多大の効果を奏せり

金澤布教 △九月十三日夜立正會講演「眞善美」本郷宮次郎氏。△十七日夜坂井追悼講演「感佛論」本郷氏。△廿四日夜晴明婦人會講演「誓願力」本郷氏。△廿八日午後三時本行寺例會講演「法華經講義」本郷氏。

台灣松鵜師の健闘

台灣台中に教會所を創設し、弘教に努力せる松鵜妙明師は、大に教線を擴大すべく計畫し、左記各所に於て講演した。

九月十日斗六東洋製糖倶樂部△十二日斗六街倶樂部　△十二日午後七時半臺中布教所龍口法華會供養執行△十三日夜臺中市貴田商店前(戸外講演)△十五日南投倶樂部△十七日集々街△十八日埔里街△二十日から布教所で秋季彼岸法要執行說教△廿一日市内櫻邊書店前(戸外講演　△廿三日秋季皇靈祭嚴修大施餓鬼執行△廿四日から三日間(貴田商店前戸外講演)△廿七日から五日間北新公園

又臺灣の首都臺北迄乘り出し、辻說法を試みた。左に臺灣日々新聞の記事を轉載する。

辻說法

臺北法華宗從連が臺中布教所主任立正結社臺灣支部長松鵜岡時師を招聘して、辻說法を乞ふことになつた。場所は櫻國公園で、二十九日午後正七時より、講題は「日本國體と日蓮聖人と明治天皇」又三十日は「現代思想に就て」の講演で多數の聽講があつた。

名古屋宣傳の本據
教化會館の上棟式

常德寺の十一別の大本堂が狹くなつた、靈界の權威本多大僧正を月々迎へて、大名古屋市がヒクタリかへる樣な統一團結人會員の猛烈な準備運動に、優に千數百名を收容し得べき大伽藍が、潮とよする民衆を容れ得なくなつた。

遂に常德寺移轉の大英斷となり、千古未曾有の大事は、當然の成行として、聽衆頓挫後多の難關に際會したが、一切の障害は本多猊下の指導と同友住職の熱體と努力に碎破され愈々巨萬の資を投じて、理想の會館は工事を開始した、そして十月十九日を以て眞に因緣と聞つた僧俗相會し、莊嚴なる上棟式は擧行された。新會館の名は猊下から「教化會館」と命ぜられた。そして本年中に落成の豫定との事だ。

改名廣告

改名しました、どうかよろしく

舊名　常宣
改名　日見

福井縣足羽郡社村南居妙正寺
兒玉日見

立正館建設淨財勸募之辞

世道人心荒廢シ國民思想ハ混乱シテ日々險惡ナラントス、憂國ノ士豈ニ慨嘆セザランヤ斯ノ難局ヲ開轉セシムルニハ最高ノ宗教ニ依テ國民精神ヲ振作更張シ、思想ヲ啓發善導スルヲ以テ要諦ナリト信ス、大聖釋迦牟尼世尊ハ毒蛇猛獸ヲ恐怖スル事勿レ惡思想ヲ警戒セヨ、惡思想ハ無量ノ善心ヲ壞リ惡道ニ墮スト宣說シ給フ(取意)

高祖日蓮大聖人ハ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ「國土乱レン時ハ先ツ鬼神乱ル、鬼神乱ルガ故ニ萬民乱ル」ト喝破シ給フ、國民思想ノ惡化ハ遂ニ其ノ國家ヲ破壞シ國民ノ福利ヲ危殆ナラシムルノ例證近キニアリ願ルニ我カ吳市ハ帝國海軍ノ中樞ニシテ國防工作ノ源泉ナリ否東洋平和ノ秘鍵ナリ十有五萬市民ハ其ノ細胞ナリ、機能ナリ、是ノ如キ樞要ナル都市ニ於テ開顯統一ノ妙教日蓮主義道場ノ完備ヲ缺クハ聖代ノ一大恨事ニシテ末流ヲ汲ムモノ眞ニ慙愧ニ堪ヘザル所也、茲ニ於テ吾等同人數年來念願セル立正館(教會所)ヲ建立シ正法廣宣ノ天業ニ參加躬行スルノ光榮ニ浴シ、竿頭一歩ヲ進メテ各宗各派ノ偏重ヲ正シ、佛教ノ社會教化運動ノ爲メニ公開シ、國民精神作興、思想善導ニ貢献シ、以テ本佛恩山ノ一塵ニ應ヘ聖恩德海ノ一滴ニ擬シ奉ラントス、希クハ清信ノ士女振テ斯ノ淨業成就ノ爲ニ隨喜贊助アラン事ヲ

發起人

富元會榮　田中宣正　眞鍋鶴吉　田中慶太郎
加賀一セイ　加藤淺市　桐山慶平　檜崎長市
小阪武助　世羅贊之助　原田良圓　外一同

淨財勸募要項

一金六千七百圓也
一金六千圓也
一金壹千六百圓也
一金壹千圓也
合計金壹萬五千三百圓也

敷地　約九十坪
會館木造建　約六十坪
庫裡木造建　約二十坪
御寶前裝飾費

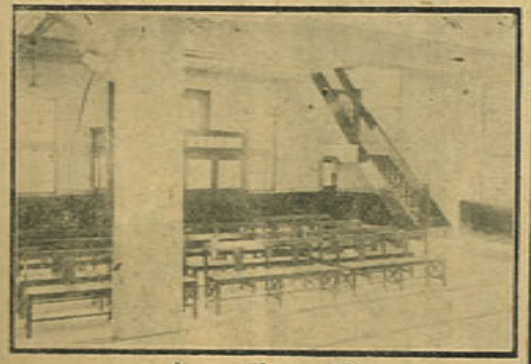
朝鮮釜山の教會所成る

横山惠正師の努力により、二萬數千金を費した釜山の教會所は、工事全く成り、十月十七、十八兩日本多管長親下を迎へて落成式開堂大法要を奉行し並に紀念大講演會を兩日晝夜奉行した

× × × × ×

（朝鮮釜山）顯本教會々堂

※ ※ ※ ※ ※



聽講席

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

御本尊奉安所

大僧正
本多日生師著

本尊論

目次

一、緒言…二、宗教と本尊…三、諸種の本尊觀…四、本尊と眞理…五、本尊と倫理…六、本尊と救濟…七、佛教の本尊觀…八、佛教の三寶觀…九、佛身觀の要旨…一〇、滅後信仰の概觀…一一、佛教本尊の三方面の考案…一二、法華經に顯はれたる本尊…一三、遺文に顯はれたる本尊…一四、本尊の勸請文…一五、本尊勸請の實例…一六、遺文の會通…一七、異論の解決…一八、結論

定價　紙裝一部　金五十錢　布裝一部　金七十錢　送料金四錢

發行所　立正結社

賣捌所　名古市東區田代町常樂寺內　統一編輯局　振替名古屋一〇八一九

社寺建築設計監督及臺灣檜材の安價提供

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及內務、文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候

追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候

臺灣檜材ノ六大特徴

一、耐久防腐
二、蟻害絶無
三、香氣清楚
四、木質堅靱
五、木理整然
六、木色高雅

東京市麹町區有樂町三丁目三番地
社寺工務所
（電話銀座五〇八八番）

神奈川縣鶴見町
社寺工務所鶴見支所

福岡市外堅箱町馬出松原
社寺工務所福岡支所
（電話二二三〇番）

大阪市西區市岡町七十九番地
社寺工務所大阪支所
（電話西三二二四番）

統一定價

一冊	金貳拾錢	送料五厘
半ヶ年	金壹圓貳拾錢	送料共
一ヶ年	金貳圓貳拾錢	送料共

統一廣告料

表紙一頁	金貳拾圓
一頁	金拾五圓
半頁	金九圓
四分一頁	金五圓

前金之事

大正十四年十一月一日發
大正十四年十月十七日印刷納本行（第三百六十八號）

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
編輯兼發行人　國友日斌
印刷人　鈴木日雄

名古屋市東區千種町字五反田五二番地
印刷所　三益社

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
發行所　統一發行所
振替東京五一〇七一番

名古屋市東區田代町字城山七十七番地
編輯所　統一編輯局
電話東五四八七番
振替名古屋一〇八一九番

不許複製

昭和三十年二月二十日　福岡三種郵便物認可
昭和三十年三月　日　第三種郵便物認可

目次

教義信條の整束……本多日生
信行の基調を說ける觀普賢經……井村日成
罷睡錄……黃薇菴青村
童話べらぼうの話……古田昂生
記事報導……

第廿九年拾二月號